

道元禪師の思惟の構造

——確信の根拠に関する試論——

岡 島 秀 隆

序

『正法眼蔵』を読みすすむうちに刻々と強くなる印象がある。それは、著者道元禪師のもつ内的確信が明らかにその表現にこめられて現出しているという思いである。『眼蔵』の表現の重要な性向と考えられるこの確信性の根拠は一体何なのか、そしてその内容は如何なるものであろうか。一般的には、禪師の宗教的確信の根拠はその生涯の体験によってつちかわれ、殊に禪的悟りという真体験において最終的に確立せられたといえよう。しかし、この一般論を別の観点から論じなおし、その曖昧さを払拭しようとする試みは無駄でないように思われる。以降の論及においては、『眼蔵』の表現の検討をもとに禪師の確信の根拠と内容について少しく考察を試みたい。

確信の根拠

『眼蔵』には仏道修行の態度を教示するために幾多の表現が駆使されている。『眼蔵』の全巻がその目的をもって著されたという趣きさえある。その中でも最も顯著にそうした意図をもって用いられる語に、がくす（学）「まなぶ」・したがふ（随、従）・しる（知、智）・ならふ（習）などの動詞がある。まず、これらの語に注目して禪師の叙途を検討することにする。

^{*}以前の教条は、古仏の身心なり、うやまひ、したがふべし。

〈重雲堂式〉

これは、興聖寺重雲堂開堂にあたり、修行僧の威儀作法を定めるため示衆された言句であるが、その性質上權威ある語調が要求される。文章の要点は、そこに書かれた内容が「古仏の身心」であるから諸衆は従うべきだというのである。

おほよそ經卷に從^{したが}學するるとき、まことに經卷出來す。その經卷といふは、尽十方界、山河大地、草木自他なり、喫飯著衣、造次動容なり。この一一の經典にしたがひ學道するに、さらに未曾有の經卷、いく千萬卷となく出現するなり。……中略……いま西天の梵文を東土の法本に翻譯せる、わづかに百萬軸にたらず。これ三乘、五乘・九部・十二部あり、これらみなしたがり學すべき經卷なり。

〈自証三昧〉

ここに從うべきものとして示されるのは、經卷である。道元禪師独自の見識によって、その經卷とは、實在する仏教典のみならず、その仏心の意の表出するところ、即ち本来的な仏の教えの顯わとなる尽地全界なのであるが、そこに眞の仏心・仏道の開示あるがゆえに、その開示たる經卷こそ從うべきものとされるのである。いわゆる「或從知識、或從經卷」の言句の説かれる所以である。

またかの結果と稱するところにすめるやから、十惡をおそるることなし、十重つぶさにをかす。ただ造罪界として不造罪人をきらふか。いはんや逆罪をおもきこととす、結果の地にすめるもの、逆罪もつくりぬべし。かくのごとくの魔界はまさにやぶるべし。仏化を學すべし、仏界にいるべし、まさに仏恩を報ずるにてあらん。

〈礼拝得髓〉

以上の文は、結果の語を參究の題材として当時の僧界にはびこる弊風を批判して、結果の眞意を説かんとする箇所であ

る。この批判の根拠もまた正法に反するという点であり、學すべきは仏化、正伝の仏法のみであるとされる。

いまの人も、むかしの祖師をまなぶべし。袈裟を受持すべからず。その正伝の袈裟といふは、いまだ少林曹谿より正伝せるは、これ如来より嫡嫡相承すること、一代も闕^{きつ}闕せざるところなり。

〈伝衣〉

ここには、袈裟の正伝正受の重要性が力説されている。そして誤ちなき正伝とはまさに、「嫡嫡相承」することによって成就するのであり、その相承のあり方とその正しさの根拠は、「むかしの祖師」の言行に帰せられている。結局ここにおいてまなぶべきは祖師の言行であり、その内容は袈裟の正伝の実態及び正しい塔袈裟法ということになる。

心をもて學するとは、あらゆる諸心をもて學するなり。その諸心といふは、質多心・汗栗駄心・突栗駄心等なり。また感應道交して、菩提心をおこしてのち、仏祖の大道に帰依し、發菩提心の行李を習學するなり。たとひいまだ、眞実の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならぶべし。

〈身心學道〉

學仏道の方法のうち心學道について叙述されるこれらの文中には「ならぶ」の語がみられる。引用の終わりに用いられるこの動詞の目的語は「仏祖の法」である。また他に「習學

する」ともあり、その目的語が「発菩提心の行李」であることをも考え合わせれば、ここであらふべきは仏祖の法、より直接的には仏祖のたどり、行じた発菩提心の方途といえる。而して観点を變じれば、ならふことの根拠は、それが仏法であるからということになる。付言すれば、「弁道話」の巻中にも「ただ仏弟子は仏法をならふべし」の言句がみられる。

こうして『眼蔵』中の数例の言述を検討してみると、そこで主張される仏道修行の基本的態度の根底には、特定の權威、つまり宗教的信の問題として取り上げられるとき、絶對的真理と述べられるものがある。それは古仏の身心といわれ、或いは經卷であり、仏化であり、祖師の言行に顯現する正伝の大道である。それを一口に仏法と称してもよい。いま少し引用を続けよう。

古仏心といふは、むかし僧ありて大證國師にとふ、いかにあらんかこれ古仏心。ときに國師はいく、牆壁瓦礫。しかあればしるべし、古仏心は牆壁瓦礫にあらず、牆壁瓦礫を古仏心といふにあらず。古仏心、それかくのごとく學すなり。

（身心學道）

南嶽山石頭菴無際大師上堂、示大衆言、吾之法門先仏伝受、不_レ論_二禪定精進_一、唯達_二仏之知見_一。……中略……しかあればしるべし、先仏伝受の仏道は、なほ禪定といはず、いはんや禪宗の稱論ならんや。あきらかにしるべし、禪定と稱するは、あやまりのはなはだしきなり。

（仏道）

「しる」の用例として掲げたこれらの表現の分析にあたつて注目されねばならないのは、「しかあればしるべし」という用法である。この句の構成部分の解釈は紙数の都合上割愛するが、最も重要な点は、この句の前文と後文の間には明らかな相互関係があり、それをこの句が強調しているということである。つまり、前文は後文の根拠を示し、逆に後文は前文の理由から導出される歸結として叙されていると考えられる。そして本論で留意すべきはまず、その根拠が如何なるものであるかである。引用文の兩者とも、それは『景德伝灯録』にあらわれる祖師の言句であり、更にいえばその内容なのであり、かつその内容が道元禪師によつて仏法そのものと認められているのである。そこに至つてはじめて禪師はこれらの根拠から当然のこのように各々の結論を導出してみせるのである。

さて、このように考えてみると、禪師の叙述に現われる確信の根拠は諸言を用いながらもその深部に於いて仏法そのものであると總括できる。しかしながら仏法の語は実に曖昧な印象しかあたえない感がある。むしろ、その仏法の名に則つて所々で指摘される具体的命令、勧誘の言葉にこそ、仏法のそしてそれを体得した禪師自身の妙用があるといったほうがよいかもしれない。ただ、「仏法」とのみ述べられる箇所も多々あり、その真に示すところは、それを内側からみる

ことを得ない限り知られないのであるが、禪師は未悟の立場をもふまえて、次のように叙している。

しかあれども、まなこのみづからをばみるものまれなり、ひとり仏のみこれをしれり。……中略……しかあれば、みづからとしるも、しらぬも、みなともにおのれにあらぬ尽大地はなし。このときのごとは、かのごときの人にゆづるべし。

〈唯仏与仏〉

鳥は鳥のあとをみるなり。このことは、仏にもあり。……中略……仏にあらぬは、仏のまなこそなへず。仏の、ものかぞふるかずなり、しらねばすべて仏のみのあとをば、たどりぬべし。

〈唯仏与仏〉

「ひとり仏のみこれをしれり」「仏にあらぬは、仏のまなこそなへず」の言句は、未悟者には厳しい。仏眼をそなえること、仏法に通達することは仏にだけ許されることであって、それ以外の者には絶望的ときえ思われる。しかし、禪師は「仏性」の巻で「悉有は仏性なり」ともいう。そこから推論すれば、我々に可能性は残されているのである。鳥が鳥のあとを見、魚が魚のころをしるように、仏性を具有するものとして我々は現に『眼蔵』の言述をたどり、そのころをしるうとしている。かくして禪師の言述をたどるとき、そこには「このときのごとは、かのごときの人にゆづるべし」とか「しらねばすべて仏のみのあとをば、たどりぬべし」の文が存する。先の文中の「ゆづるべし」も、後者の「たど

りぬべし」も決して他人まかせというのではない。それは言わば絶対帰依の精神をいうのである。それは、仏のみち（仏道）という權威を受用することであり、かかる權威の方法こそ禪師の示唆し、すすめる手段なのである。

權威の方法

ところで、權威の方法と述べられるものは、C・S・パースも指摘するように、殊に政治、宗教の領域乃至社会全般において、人類創成以来広く行なわれてきた古典的思考法といえる。だが、この方法は多くの誤ちをも生むものであって、その理由は、基本的に權威の内容の真偽を徹底的に吟味しないところにあると考えられる。その内容が一般に未知未倒のものと思われる場合、状況は更に顕著である。確かにそれが宗教的信の問題に関わるとすれば、この權威の方法は、半ば、強制的無反省的傾向をもって作動することがあろう。それは『眼蔵』中にみられるこのような手法は、果たして如何なる構造を所持しているのだらう。実に、それは、先述したごとく単に無批判的他人まかせを標榜してはいない。以降にこのことを宗教的信の観点から例をあげ、些かの考察をなす。

しるべし、三帰の功德、それ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊すでに証明します、衆生まさに信受すべし。

〈帰依三宝〉

帰依三宝の功德を説く有名な一節であるが、そこに「信受」とある。信の問題を『眼蔵』に即して考えるとき重要な言葉である。「信ずべし」といわず、このように叙するのは、「受」の語にこめられた意があるからである。別に「信受護持」の語の使用される点からも推して理解できるように、この信受とは瞬間的直感的なものではなく、たとえそうした傾向を内含しようとその要点は持続的な信の状態でいわれている。また、この信の保持にあたっては、世尊の証明という事態が大きな力をもつ。そしてそこでの世尊とは、人知を凌いだ全き超越者としてあるのみならず、我々と共にありながら導き手でもある先達の姿を示している。我々は故に悲愴にすぎたのではなく、絶えず勇気づけられつつ仏道を歩みうるといえる。

また信受の語はしばしば他の語をとめないそれが語意を補足している。

清涼院大法眼禪師云、若見諸相非相、即不見如来。……中略……この相すなはち如来相なるがゆえに、諸相は諸相なるべしと道取するなりといきたれり。まことにこれ大乘の極談なり、諸方の所証なり。しかのごとく決定一定して、信受・参受すべし、さらに随風東西の輕毛なることなかれ。諸相は如来相なり非相にあらずと参究見仏し、決定・証・信して、受持すべし、諷誦通利すべし。

（見 仏）

あきらかにしりぬ、むかしよりいまに出家の功德なからん衆生、ながく仏果菩提をうべからず。この婆羅門、わづかに酔酒のゆえに、しばらく微心をおこして、剃頭受戒し、比丘となれり。酒酔さめざるあひだ、いくばくにあらざれども、この功德を保護して、得道の善根を増長すべきむね、これ世尊誠諦の金言なり、如来出世の本懐なり。一切衆生、あきらかに已今当のなかに、信受奉行したてまつるべし。

（出家功德）

信受は自己の決定を前提している。ここにいう決定とはまた、知的認識によってもたらされる単なる判断ではなく、修行者の全人格をあげての意志的決心であるから瞬間的なものではない。信受とは不断の決定といえる。他方信受は奉行と結びついている。『眼蔵』には行・仏の教えがあるが、信というものが行的実践を介して証されるところに信受の真の意味が存するのである。このように、信受とは決定と奉行によって真意を開示する。そしてこの決定―信受―奉行のあり方は、図式化すると一定の心的段階を表わす三要素から成り立つようにみえるが、かえってそれらは相互に包摂しあい、仏道の語に総られて不離一枚のものとなっている。換言すれば、仏道の信受とは宗教的權威を盲目的に信することではなく、その權威の内容を自主的決定をもって受け入れ、行的実践によって断えず証してゆく全人格的営為といえるのである。先に述べた「絶対帰依の精神」及び「權威の方法」の呼

称もかかる意味において用いられるべきものである。

結 語

最後に本論で充分に考究しえなかった点について付言して結びにかえることとする。

その第一点は道元禅師の確信の態度（表現）の根拠についてである。既に論じたように、この根拠は仏法の一語に集約しうる。しかし、『眼蔵』において仏法の名のもとに説示される内容には、禅師固有ともいえる解釈が含まれているのも事実である。通常解釈とは、本意の部分的理解であり、相対的見地を前提にしてなされる二次的な何ものかであるのだが、禅師自らが脱落を体験して仏心に到った者、仏眼を具する者として語るとき、その言述は最早仏言・仏教に等しいといえよう。

第二点は、『眼蔵』において教導的態度を表示する動詞の意味についてである。本論に取り上げた「がくす（学す）」「しる（知る）」等の動詞は種々の意味に用いられるのが実状であるが、禅的立場からこれらの語が使用されるとき、一貫して実践の態度の表明を目的としているのは当然のことである。しかるに、これらの語がなお幾ばくか知的認識という意味を含んでいることも事実である。ひと度開悟して下化衆生の立場に到れば、道元禅師自身が言句を勞さねばならなかったの

であるし、また行的実践道に一路まい進する修行者の側に立つならば、時々自己の行為を点検するためにも仏祖の行実を顧なければならず、そのための知的理解は一層必要といわねばならない。要するにこれらの言葉は仏法に対する主体の特定の態度を示すが、その態度はさしあたり仏法という漠然としてはいるがひとつの概念に向けられているから、一定の認識作用の意味をも有することになる。しかし、同時にその認識理解が究極的に実践道へと反映されるのでなければならぬからには、それは実践的なものでもある。結局これらの動詞の意味はかかる両面を具有したままに用いられているのである。

尚、これらの動詞は「從学」「習学」等の熟語を構成したり、並列して使われることがある故に、本論ではこれらを一応類義語として取り扱った。

※引用は、衛藤即応校註『正法眼蔵』復刻版から行なった。

※註記省略

※傍点筆者

△キーワード▽ 正法眼蔵、信受、確信の根拠

（愛知学院大学講師）